

ネットいじめの実態とその抑止策に関する実証的研究

代表研究者	原	清	治	佛教大学	教育学部	教授
	山	内	乾	神戸大学大学院	国際協力研究科	教授
	大	多	直	帝京大学	教育学部	講師
	浅	田	瞳	佛教大学	教育学部	非常勤講師

0. はじめに

携帯電話などのネットワークを介したいじめの問題が深刻化している。こうした事態に対処するため、2008年6月に「青少年ネット規制法」が成立したことは記憶に新しい。それは、18歳未満の青少年が携帯電話を利用する場合に、保護者からの申し出がある場合を除いてフィルタリングを適用することを各電話会社に対して義務付けるものであった。しかし、フィルタリングの導入がネットいじめの万能薬とは言いがたく、子どもたちを守る本質的な取り組みが喫緊の課題となっている。

本稿は、A行政区内の学校や教育委員会などの協力を得て、域内の児童・生徒に対してアンケート調査を実施した結果（2010年）をもとに、そこから見えてくるネットいじめの実態とその背景となる要因を分析するものである。最近のいじめの特質に沿って、とりわけネットいじめに遭う子どもたちにはどのような特徴があるのかについて論をすすめてみたい。

1. 最近のいじめの特質

文部科学省はこれまでのいじめの定義であった「自分より弱いものに対して一方的に、身体的・心理的に攻撃を継続的に加え、相手が深刻な苦痛を感じているもの」を、2007年に新たに「一定の人間関係のある者から、心理的・物理的攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの」であり、「いじめか否かの判断は、いじめられた子どもの立場に立って行うよう徹底させる」と変更した。しかしながら、いじめと一口にいっても実態はさまざまであり、その行為がいじめであるか否かを判別する基準もあいまいであると言わざるを得ない。したがって統計上の数値では漸減傾向にあるいじめは、あくまで教師などの第三者によって「発見」されたいじめであり、当事者以外の者からの「見えにくさ」をその特質のひとつとする。

では、最近のいじめが見えにくくなっている要因は何だろうか。

背景には、前述の定義にあるような「一定の人間関係」をもつ仲間集団のなかにいじめが入り込みはじめたことがあげられよう。かつてのように、どのグループにも属さない「生け贄の羊」を、集団でいじめるといったタイプは少数化し、いつも一緒にいるグループの中にいじめの対象となる子を作り、ときに「遊び」や「ふざけ」の延長線上に潜んでしまっているケースが多くなってきている。たとえば、集団で大縄跳びを跳んでいても、ひとりだけずっと縄回しをさせられている子がいるのを、他の子たちは知っていながら見て見ぬふりを決め込んでいたり、ドッジボールやサッカーを一緒にしていても、一度もボールが回ってこないのに、ボールの後片づけは決まってその子の役割だったりする事例がそれである。このタイプのいじめは、周りからは一緒に仲良く遊んでいるようにしか見えないために、先生たちも親も相当に注意してみなければ発見できない。この場合、加害者たちもいじている認識がかなり低い場合が多くだけでなく、被害者も「なんとなくみじめ」な自分はわかっていながらも、いじめられているとは明確には自覚しにくい。

また、こうしたいじめの被害者となる子どもの特徴として、森口（2007）はクラス内のステイタスを表す「スクールカースト」の下位に位置する場合が多いことを指摘している。スクールカーストを決定する要因には、面白さやコミュニケーション能力の強弱があるといわれ、成績や運動能力、容姿などのように判断基準が目に見えやすいものよりも、KY（空気を読めない）なことがカーストを下げってしまうのである。

表1 被害者と加害者の付き合い方

付き合い方	性別		学校別		全体
	男性	女性	小学校	中学校	
よく遊んだり話したりする	44.1%(191)	51.8%(265)	51.3%(232)	45.5%(225)	48.3%(457)
時々話したりする	36.7%(159)	29.1%(149)	33.4%(151)	31.9%(158)	32.6%(309)
ほとんど話をしない	15.5%(67)	17%(87)	13.7%(62)	18.6%(92)	16.3%(154)
ほとんど知らない	3.7%(16)	2.1%(11)	1.6%(7)	4%(20)	2.9%(27)
計	100%(433)	100%(512)	100%(452)	100%(495)	100%(947)

出典:森田洋司監修『いじめの国際比較研究』金子書房 2001年 p79

いずれにしても、最近の子どもたちは、一人で孤立するよりは、必ずしも仲良しでなくとも一定の人間関係をもつグループ内に留まろうとする傾向が強い。形式的に依存関係を続けるなかにいじめが入り込んでいく状況は、表1のデータからも明らかである。日ごろから「よく遊んだり、話したりする」ような一定の人間関係をもつグループ内の「仲間」同士に、最近ではいじめ関係が多く存在するのである。

2. ケータイの普及とネットいじめの蔓延

こうした、最近のいじめの特質に沿ってネットいじめが起こればどうなるだろうか。周りからはまったく見えないネット環境のなかでいじめが進行した場合、大人がその内容を把握することはほとんど不可能であり、その実態が陰湿になるであろうことは誰もが容易に想像できる。

確かに情報社会の進展によって、我々の日常生活はたいへん便利になった。インターネットの一般家庭への普及率は91.1%ともいわれており、こうした情報社会の急速な展開は、子どもたちの生活にも大きな変化をもたらしている。それを典型的に現しているのが、子どもたちへの携帯電話の普及率の高さであろう。

A市の調査によると、小学生の携帯電話の所持率は29%、中学生は67%、高校生では95%という結果が出ている(2007年)。また、「子どもに初めて携帯電話を持たせたのはいつですか」という保護者への質問では、「小学校4年生から」が14.6%ともっとも高い値を示した。これは子どもの通塾開始の年齢とほぼ符合し、親にしてみれば、塾や習い事への行き帰りの安全確保のためにと持たせたツールであるかもしれない。しかし、携帯電話は子どもたちにとって危険と隣り合わせの道具であるということも視野に入れておかなければならない。それは「ネットいじめ」と呼ばれる新たないじめが、利便性が向上した携帯電話などの情報ツールを用いて行われているからである。

表2 ネットいじめの被害に遭ったことのある子どもの割合

	小学校	中学校	高等学校
今回の調査	12.5%	29.7%	21.5%
(参考)A市(2007)	6.3%	23.7%	18.1%

ネットいじめは、どのくらい子どもたちに蔓延し始めているのだろうか。表2にあるように、今回の調査データ(2010年)からは、小学生で12.5%、中学生で29.7%、高校生で21.5%という結果が出ている。ネットいじめの被害は経年変化で見ると増加傾向にあり、また、中学生までは学年進行に伴ってその割合も拡大する。とりわけ中学生においてもっとも被害の割合が高くなるのがわかる。

3. ネットいじめの分類

ネットいじめは大きく二つに分類できる。ひとつは「直接型」で、本人のプロフやブログに悪口を書き込んだり、勝手にホームページ内容を書き換たり、メールに「キモイ」「早く死ね」といった誹謗中傷を書き込んで送りつけたりする類のものである。もうひとつは「間接型」といわれ、典型的な例が「学校裏サイト」や2チャンネルなどの掲示板を使って、「〇〇高校の△△はウザイ」とか、「●年●組の××、ムカツク」とい

った具体的な個人名をあげて誹謗中傷の書き込みをするケースである。これは、本人が検索しなければ自分のことが書き込まれているかどうかわからないが、書き込みがあったことを発見した時のショックは大きい。そうした意味では落とし穴を掘ってターゲットがはまるのを楽しむ「落とし穴」型のいじめとも換言できる。

表3 ネットいじめの被害内容の割合

	小学校	中学校	高等学校
直接型(なりすましメール、ブログ・プロフの誹謗中傷など)	9.6%	19.6%	7.8%
間接型(学校裏サイト、掲示板への個人情報流出など)		10.1%	13.7%

*表3の被害内わけ。本稿では、とくに子どもたちの携帯の利用実態に沿って使用する場合には「ケータイ」と表記するが、ケータイ被害には、架空請求やチェーン・メールなどの被害も含む

表3は学年別における直接型と間接型のネットいじめの被害の割合を表したものである。ここからは、学年が進行すると間接型の割合が増加することがわかる。とりわけ、中学生や高校生においては、ネット上の掲示板などに自宅の住所や電話番号、ケータイ番号やメールアドレス、顔写真などの個人を特定する情報を公開する「さらし」と呼ばれる間接型のネットいじめが増加する。本人が知らないままに誹謗中傷がネットの世界で行われ、それに気がついたときに被害者が大きな精神的ダメージを受けるのである。

今回の調査からも、自分に対して心無い言葉を書き込んできたのが誰なのかを考えると疑心暗鬼になったり、友人に対する不信感が募るといった類の声を聞くことが多かった。また「学校に行きたくないと思った」といった声も少なくなく、ネットいじめは、これまでのいじめよりも「怖く」て、精神的に「痛い」ものであると考えられる。

4. どんな子がネットいじめの被害に遭っているのか

ここでは、各項目別にとらえたネットいじめの実態について詳しく見てみたい。表4は性別とネットいじめの被害との関係を示したものである。ネット被害は女子に多い傾向をみてとることができる。ネット環境の利用頻度を調べても、女子は男子よりも多くメールをやりとりし、インターネットに長時間接続している事実があり、学校から帰った後も絶えず友達と「つながっていたい」意識が顕著であり、ひとたび現実世界での行き違いが生じた時、その「はけ口」や「チクリ」の場がコミュニケーション・ツールであるネットを通していじめへ転化しやすいと考えられる。

表4 性別×ネットいじめ被害の割合

	小学校	中学校	高等学校
男	11.3%	17.7%	15.1%
女	14.5%	33.4%	29.5%

次に、ネットいじめの被害とネット環境の利用頻度との間にはどのような関連が見られるだろうか。表5はネットいじめの被害と1日の平均メール回数との関係を見たものである。

直接型のネットいじめが、メールやプロフ、ブログを介して多くみられたことからわかるように、やはり被害を受けた子のメール利用回数は全体的に多く、学年が進行するにつれてその頻度も増加していることがわかる。最近、小学生を中心にメールのやり取りに「15分ルール」が広がっているという。友だちからメールを受信すると、15分以内に返信をしなければ「あいつは自分のことを大切な友だちだと思っていない」とみなされ、翌日から無視の標的とされてしまうなどの罰則が決められているものである。こうしたルールがあると、子どもたちは食事やトイレ、果ては風呂場にまでケータイを持ち込むケースも見られる。保護者へのインタビューでも、「どれだけ注意しても我が子がケータイを手放そうとしない。結局こちらが折れて今は好みに触らせている」などの意見が聞かれた。情報ツールへの依存が強い子どもほど、ネットいじめの対象となりやすい現実があるにもかかわらずである。

表5 メール平均回数×ネットいじめ被害の割合

	小学校	中学校	高等学校
0通	49.6%	31.4%	11.9%
10通未満	15.1%	28.4%	40.0%
10～30通	16.7%	18.3%	21.3%
30～50通	14.3%	14.9%	15.7%
50～100通	3.1%	3.6%	5.2%
100通以上	1.2%	3.4%	5.6%

表6はネットいじめの被害と子どもたちの現在の学習の理解度との関係をみたものである。これをみると、どちらかといえば学校での学習内容がよく理解できている子どもたちにネットいじめの被害割合が高いことがわかる。小学校段階での学習理解度（いわゆる測定可能な学力）とネットいじめとの関係にはいくつかの解釈が可能である。たとえば、学力上位層の子どもたちには通塾している割合が高く、彼らに中学校受験を含めたストレスがかかりやすいことが背景にあるという考え方や、彼らの家庭階層が高く、ネット環境への接触頻度が多いことが原因となっているという考え方などがそれである。学力との関係については、後段で詳述するのでここではその特徴の指摘にとどめたい。

表6 現在の学習の理解度×ネットいじめ被害

	よく理解できることが	まあまあ理解できる	あまり理解できないことが多
ネットいじめ	17.2%	8.1%	9.9%

*小学生を対象とした「学校の勉強は、どの程度理解できますか」の問いに対する回答。それぞれのセルを100%として、ネットいじめの被害に遭ったことのある割合を算出

5. 学力移動とネットいじめの相関

子どもたちのネットいじめの有無と学力との間には、何らかの関係性があるのではないかという特質を見出すことができたが、それをより明確にするために、ここでは、「学力移動」の分析フレームに注目してみたい。「学力移動」とは筆者らの研究グループ（原・山内 2009 他）が学力問題を研究するなかでみられた特徴であり、個人の相対的学力が所属集団の内部で上昇移動したのか下降移動したのか（あるいは移動しないのか）によって、その個人の内面的な意識や行動にさまざまな変化が起こることに注目したものである。

表7 学力移動別ネットいじめ発生率

中学1年生

	よく	まあ	あまり
よく	6.0%	8.7%	10.5%
まあ	16.3%	8.0%	13.0%
あま	23.1%	13.0%	7.2%

*「学校の勉強は、どの程度理解できますか」の問いに対する回答。それぞれのセルごとにネットいじめの被害に遭ったことのある割合を算出、「よく」: 学校の勉強はよく理解できることが多い、「まあ」: まあまあ理解できる、「あまり」: あまり理解できないことが多い

本研究においては、ひとまず「学校の勉強がどの程度理解できるか」を学力を表わす指標と置き換える。そのうえで、「よく理解できることが多い」、「まあまあ理解できる」、「あまり理解できないことが多い」の3分位に分割し、小学校高学年から中学1年にかけて相対的な学力分位がどのように移動するか（しないか）によって、ネットいじめの被害を受ける割合がどのように分布するのかをみてみたい。

表7は小学校高学年から中学1年にかけての学力移動別ネットいじめ被害発生率である。ここからは、ネットいじめの被害が相対的な学力が上昇した子どもたちに多く発生しやすいという特性をもつことが読み取れよう。とくに以前に学力が下位層にあった子が上位に移動した左下周辺のセルにおいて、ネットいじめ発生率をもっとも高く（小学校「あまり」→中学校「よく」: 23.1%、小学校「まあ」→中学校「よく」: 16.3%）、相対的な学力が移動しないセルにおいては比較的低い数値となっている。

学力が上昇移動した背景には通塾などによる影響が大きいと考えられ、その子らのなかには小学校の高学年まで付き合っていた仲間関係をいったん清算したり、塾や中学校での新しい仲間への乗り換えをすること

も考えられる。逆の立場の子からすれば、それまで「自分と一緒に」と思っていた友だちがKY（空気を読まずに）に勝手に乗り換えたことに対して、「エエ恰好してる」とか「なんでやねん」といった妬みややっかみの感情が生まれることは想像に難くない。そういったKYだと見られてしまいがちな子に対して、「何か罨をしかけてアイツに痛い思いをさせよう」といった思いが、周辺の子どもたちをネットいじめへ向かわせる一因となっているのではないかと考えられる。前述の「さらし」には、そうした類の書き込みや昔ネタのリークが少なくない。

6. ネットいじめの被害者が加害者に

ネットいじめの被害と加害は相関関係にあり、ネット上で嫌な思いをしたことのある子が加害者に変貌する「立場の逆転」ともいうべき悪循環をもたらしている恐れがあることは、これまでも再三指摘されてきたことである。表8はネットいじめの被害と加害の関係をみたものである。両者の間には、やはり強い相関が見られ、とくにネットいじめの被害に遭った子の約3分の2が別の子へのいじめに加わっているのである。

表8 ネットいじめ被害の有無と×加害との関係

	加害あ	加害な	合計
いじめ被害	66.0%	34.0%	100.0%
いじめ被害	7.3%	92.7%	100.0%

($\chi^2=103.0$, $df=1$, $p<0.001$)

今回の調査でも、ネットいじめに加わったことがある子どもたちの多くから「前に自分もやられたから、やり返しただけ」といった自由記述が認められた。

こうしてみるとネットいじめの特質は、被害者、加害者という区別が曖昧であるがゆえに、誰でもいじめの対象となる可能性があることにある。こうした背景には、被害者になる

ことの恐怖心が加害者になることを誘発しているのではないかと、という指摘がなされることが多い。その両者の関係をもう少し詳しくみてみよう。

表9は、ネットいじめの被害者に、「誰が加害者かわかりますか？」を尋ねた結果である。

表9 ネットいじめ被害×加害者の特定

	特定できた	ほぼ特定できた	あまり特定できなかった	まったく特定できなかった
ネットいじめ被害	50.0%	29.2%	8.3%	12.5%

ネットいじめの被害者の79.2%が、加害者を「特定できた」「ほぼ特定できた」と答えており、前述のように被害・加害の両者の間には一定の人間関係があることがうかがえる。ネット上なら誰かわからないだろうという匿名性が（皮肉なことに、データからはほとんど匿名でなく、個人を特定されてしまっているにもかかわらず）、いじめに加担する罪の意識を薄める緩衝材となっていることも手伝って、仲間からネットいじめに誘われた際に、それに同調して自分もしなければ、逆に自分がその対象とされることへの恐怖心から集団に過度に同調してしまうというのである。とりわけ、仲間であって仲間でないような曖昧な集団に属していたり、希薄な友人関係を基盤とした集団にあっては、あるときは被害者であっても、集団に同調する意識さえあれば容易に加害者にもなり得るのである。

7. ネットいじめの抑止に向けて—家庭のネットルール作りが一助に—

性別やネット環境の利用頻度、学力や学力移動といったさまざまな条件によって、ネットいじめの被害に差がみられることが明らかとなった。それでは、最後に、そうしたネットいじめを少しでも抑止するためにはどうしたらいいのかをデータに基づいて考察してみたい。

表10はネット環境を利用する際に、家庭に何らかのルールが有るかどうかとネットいじめの被害との関係をみたものである。

表10 ネットルールの有無×ネットいじめ被害

	ルールあり	ルールなし
ネットいじめ被害あり	11.3%	19.6%

($\chi^2=18.628$, $df=1$, $p<0.001$)

ここからは、ケータイやネット利用に関して何らかのルールを設けている家庭の子は、ルールのない子どもたちに比べて、ネットいじめの被害に遭いにくいことが明らかである(0.1%水準有意)。具体的なルールを問うと、「家ででのケータイ使用はリビングに限る(自分の部屋に持って入らない)」や、「夜10時以降は使用しない」、「知らない人からのメールや電話には応答しない」などの使用場所や時間、利用相手を限定するといったルールを設けている家庭にネットいじめを大きく抑止する効果があることがわかった。また、親も子どもと一緒にルールを守り、たとえば「食事中はケータイを使用しない」で、積極的に子どもとコミュニケーションを図ろうとする家庭の子どもたちにも、ネットいじめの被害が少ないことがインタビュー調査からも指摘された。したがって、子どもがケータイやネット上で何らかのトラブルに巻き込まれたときに、保護者がきちんと事態を把握し、対応できる状況にあるかどうかでネットいじめやケータイ被害はある程度軽減できると考えられるのである。

8. ネットいじめの背景にあるもの

このようにネットいじめの実態を分析してみると、そこには現実世界でのいじめがネット世界に転じた要素が多いことがわかる。一方で、ネットいじめが子どもたちのコミュニケーションの延長線上に発生している点も指摘できる。ネット上で起こった「できごと」に対しては、いじめという認識が極めて薄く、現実世界のいじめと境界を接しているがいじめではないといった程度のあいまいさなのである。したがって、子どもたちに常にアンテナを張り巡らせて自分の立ち位置を確認し続けなければならない。とくに、ネットの世界で攻撃してくる相手が身近な誰かである、とある程度見当がついたとしても、もし現実世界でその誰かから親しげな態度に出られると、被害を受けている子どもの心はさらに不安定な状況になり、「本当は私のことをどう思っているのか」と疑心暗鬼になることは容易に想像できる。

ネットいじめは、現実世界のいじめ以上に子どもたちの不安を煽り、「立場の逆転」にみられるような自己の善悪の基準とはまったく異なった判断をせざるを得ない状況に追いやるといった特徴がある。それが被害者のみならず、場合によっては加害者の子どもたちの心を傷つけ、悩ませているのである。

ネットいじめは、どこか非現実的な世界で起こり、不特定多数による攻撃が子どもたちを苦しめている、と一般に考えられる場合もあるが、本調査の結果からみても、それはまったく事実と異なる解釈だと言わざるを得ない。その多くは、比較的身近な距離にいる友人からであり、仮想空間で生起している出来事ではなく、現実世界でのいじめとあいまいに境界を接しているものと認識し、その解決に取り組まなければならない。

そこで、ネットいじめが蔓延し始め、子どもたちの心を蝕みはじめた背景にあるものを2点指摘して本稿を終えたい。ひとつめはインターネットやケータイがもたらす全能感である。たとえば、現実世界においていじめに遭いやすいスクールカースト下位の子どもであっても、ネットなどから得られる莫大な情報と、そこへ自由にコミットできる発信機会をもつことによってある種の全能感を享受するようになる。子どもたちはネット上では別人格を演じることができるし、対面でのコミュニケーションが不要であるから、自分が傷つかずに相手とのやり取りも可能であり、嫌ならいつでも一方的に退場できる。こうした利便性から、現実世界よりもネット上での親密なコミュニケーションをとる子どもたちは決して少なくない。

ふたつめはネット上では「ネタ的コミュニケーション」(鈴木、2007)が可能なことである。ネット上もさまざまな話題に対して双方向的にコミュニケーションが取れる空間ではあるが、現実世界と決定的に異なるのは、相手のことを考えずに、時にKYでもいられるのである。話題が逸れても文脈が繋がらなくても、自分の言いたいこと(ネタ)を一方的に書き込みとして並べることができる。掲示板などは必ずしも相手の含意を汲んでまじめに答える必要がなく、すべてがネタである「かのように」振る舞い、事実かどうかよりも、繋がりたい感覚や感情を優先し衝動的に書き込むことができる場である。したがって、負の感情が沸き起こった場合に、それがネットいじめへと転化する可能性は大きい。

こうしたネット世界の特質が、ネットいじめの引き金となる背景にある。対面よりも、ネット上でのコミュニケーションを重視し、さまざまな書き込みを「ネタ」として扱うことに慣れてしまった子どもたちにとって必要なのは、やはり原点に戻って、対面でのコミュニケーション機会をできるだけ多くもつことではないだろうか。ネットいじめの被害に遭う子は、ネットの世界への依存が高く、現実世界でのコミュニケーションがとりづらい場合が多いことはその実態から繰り返し指摘してきた通りである。今後は、保護者や地域を巻き込み、家庭生活のさまざまな場面で他者と対面でやりとりをする機会を増やし、子どもが自分の意見

を面と向かって話すフェイス・トゥ・フェイスの関係を意図的にできるだけ多く作ることで、ネットいじめを少しでも減じることを考えていかなければならないのではないだろうか。ネットいじめは、ひとり子どもたちだけの問題ではないのである。

【参考文献】

- 京都市教育委員会『ケータイに関するアンケート』2007
『現代のエスプリ 2008年7月号』至文堂、2008
国立教育政策研究所「いじめ追跡調査2004-2006」2009
小林正幸『なぜ、メールは人を感情的にするのか—Eメールの心理学』ダイヤモンド社、2001
渋井哲也『学校裏サイト 進化するネットいじめ』晋遊舎、2008
下田博次『ケータイ・リテラシー』NTT出版、2004
下田博次『学校裏サイト』東洋経済新報社、2008
鈴木謙介『わたしたち消費—カーニヴァル化する社会の巨大ビジネス』幻冬舎新書、2007
総務省『情報通信統計データベース』2009
土井隆義『友だち地獄』ちくま新書、2008
広田照幸編『若者文化をどうみるか?』アドバンテージサーバー、2008
藤川大祐『ケータイ世界の子どもたち』講談社現代新書、2005
宮台真司『制服少女たちの選択』講談社、1994
森田洋司・清永賢二『いじめ—教室の病い』金子書房、1994
文部科学省「平成18年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」2007
文部科学省『青少年が利用する学校非公式サイトに関する調査報告書』2008
文部科学省「平成18年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」2007
(http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/19/11/07110710.htm、2009.9.16 アクセス)
総務省『情報通信統計データベース』2009 (<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/new/index.html>、
2009.8.24 アクセス)
京都市教育委員会『京都市「ケータイに関するアンケート」について』2007、p.2
文部科学省『青少年が利用する学校非公式サイトに関する調査報告書』2008
(http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/index48.htm、2009.8.26 アクセス)
原清治・山内乾史『若年就労問題と学力の比較教育社会学』ミネルヴァ書房、2009
藤川大祐『ケータイ世界の子どもたち』講談社現代新書、2005、pp.94-121
原清治・山内乾史『ネットいじめはなぜ痛いのか』ミネルヴァ書房、2011

〈発表資料〉

題名	掲載誌・学会名等	発表年月
ネットいじめの実態と背景	現代のエスプリ	2011年5月
ネットいじめはなぜ「痛い」のか	京都学校教育相談研究大会	2011年8月
ネットいじめの要因に関する実証的研究(Ⅰ)	日本教育実践学会	2011年11月
ネットいじめの要因に関する実証的研究(Ⅱ)	日本教育実践学会	2011年11月
ネットいじめの実態に関する実証的研究(Ⅲ)	関西教育学会	2011年11月
ネットいじめの実態とその要因(Ⅱ)	佛教大学教育学部学会紀要	2012年3月